

と信するなり一体詩や歌にても其意味の露骨なるを善とするに非ず其意味の隱微なる所に神韻の感遠なるありて以心傳心もて人を感し鬼神をも泣し

ひるに至るなり何と唯り唱歌に於て然らざらんや以上述來たる所の私見は其概略にして然も時流に逆ふの嫌ひありて恐くば大方諸氏の笑を招かんと幾度か躊躇せしも退て思ふに是れ斯道に忠なる所以に非すと且つ古言にも疑しきは問んことを思ふとわれは聊か是の疑點を擧て大方の教を請ふ

備後の毬歌

備後 佐藤 龜 一

●べにやのおかざの。うめものは。むつてもむつても。ようそまる。とんばにみづひき。みづくる

ま。みづがないとておえとまで。おえとながさき。こしかけて。こどもつさんこどもつさん、こゝはなんちうところかへ。こゝはしなのゝ。せんこうじ。うめとさくらをわけまして。うめはすいすい。もとされて。さくらはさいさい。ほめられた。

●あんなこともしうと。こんなこともしうと。いせへまいるいふて。いせのこみぞで。いかをひろうて。やいてかんがらかふて。たなべふちやけて。ねこがとてくて。ねこをばふいふて。あちのはしらで。あたまこつこつ。なわまいだ、なわまいだ。

我が地方の毬歌

相模 平 岩 繁 治

五つ六に、七八九十や、十二三十四の、れてまんなさむろく、おかしはしろかね、きよ——ろくる